一個人・一団体では守れない幌尻岳の山岳環境
10年間の日高山脈幌尻山荘排せつ物人力運搬を終えて

高橋　健（日高山脈ファンクラブ事務局長）

1　ボランティア単独の幌尻山荘排せつ物人力運搬は昨年(2014年)で終了

日高山脈ファンクラブの幌尻山荘排泄物人力運搬は昨年(2014年)で10年目となりました。昨年は9月に23名のボランティアの協力を得て実施し、210kgの排泄物を担ぎ下ろし、便槽を空にしました。

一昨年(2013年)までの9年間で、延333名のボランティアの協力により、約4,016kgもの排泄物を担ぎ下ろしました。

当会が続けていくことはボランティア運搬を固定化させる、山岳環境保全の対価を受益者に負担してもらう方法が検討されないことに繋がることから、10年目の区切りとなる2014年をもって当会主催の幌尻山荘排泄物人力運搬事業は終了する決断をいたしました。

山のトイレを考える会の愛甲哲也事務局長によれば、道内で人力だけによる排泄物運搬が行われてきたのは幌尻岳だけだそうです。

なぜボランティアによる人力運搬が行われるようになったのか、その経緯と今後の方策について触れ、多くの登山者への問題提起としたいと思います。

2 山岳環境調査を元に提言を作成し、人力運搬を開始

当会の結成は2000年、当時は日本百名山ブームにより幌尻岳の登山者が急増していた時期でしたが、どのくらいの登山者がいるのか、登山者の影響はあるのか、と言う点について、幌尻岳が含まれる日高山脈襟裳国定公園の管理者である北海道庁、土地の所有者である林野庁、どこも把握していませんでした。そこで、研究者の協力とさまざまな助成金を得て、平取町豊糠地区を登山口とするヌカビラルートへの入山者カウンターの設置、幌尻山荘周辺の水質調査、幌尻山荘利用者へのアンケート調査、北海道大学大学院生による幌尻山荘周辺の土壌調査を行うとともに、清掃登山も毎年、実施してきました。さらに道外の事例や広く意見を聞くために2004年、2005年に幌尻岳フォーラムを開催しました。

2005年2月、調査およびフォーラムでの検討結果を踏まえて、「幌尻岳」の山岳環境保全と持続可能な利用方法について、関係機関や団体、企業、登山者等への提言をまとめ、配布しました。

●当会調査による幌尻岳における現状および問題点

① 寒冷積雪地および登山ルートの条件（渡渉等）により、登山期間が夏季（7月～9月）に限定され、とくに海の日からお盆までの期間に登山者が集中している（夏季3ヵ月間の登山者2,500人、ピーク時の1日の登山者数130人）。

② 幌尻山荘周辺は、国定公園第2種特別地域及び日高中央部森林生態系保護地域保存利用地区指定区域であるが、夏季のピーク時においては山荘の定員（50人）を超える利用があり、山荘に泊まれない登山者の幕営等により、オオバコやセイヨウタンポポなど平地植物が繁茂している。

③ 日高山脈襟裳国定公園の稜線付近では幕営が登山者の判断に任せられている。幕営等により高山植物群落の裸地化が進み、また平地植物の進入が危惧される。なお幌尻岳周辺カール、稜線は国定公園特別保護地区および日高中央部森林生態系保護地域保存地区に指定されている。

④ 登山口や水場・稜線にトイレがない。そのため路肩や樹林帯、草地に排泄跡が見られ、視覚的によくない。今後は高山植物の富栄養化や水質への影響が危惧される。

⑤ 幌尻山荘トイレは地下浸透式で、糞便は山荘周辺に埋立処理をしている。その結果、土汚染が垂直方向に進行していることが、当会調査の共同調査者であった北海道大学大

学院田中あすか氏(当時)の調査によって明らかになっている。また山荘周辺水質へも微量ながら影響が出ている。

⑥　登山口までの公共交通機関が未整備なことから、登山者の車両による駐車渋滞がおきている。緊急車両の通行に支障をきたす恐れが高い状況にある。

⑦　渡渉など日本百名山のなかでは、もっとも登山技術を必要とするが、登山技術を習得していない、また無理な日程による事故があとを絶たない状況である。

●「幌尻岳」山岳環境保全と持続可能な利用についての提言

①　入山規制は必要であるとの認識であるが、その実施にあたっては関係機関、団体、地域住民、登山者等関係各位の検討組織を設立すること。

②　山岳環境保全と持続可能な利用を促進するために基礎的な調査および情報収集（入山者数の把握や利用状況など）が必要不可欠であり、管理関係機関においてその適切な調査および情報収集をすること。

③　地元自治体単独での山岳環境整備は好ましい状況とは言えず、管理関係機関および受益者による負担をすすめること。

④　未組織登山者への啓発のため旅行会社・登山用品店等を通じてマナーガイドの配布やホームページを通じての情報発信を行うとともに、登山教育施設設置の可能性を検討すること。

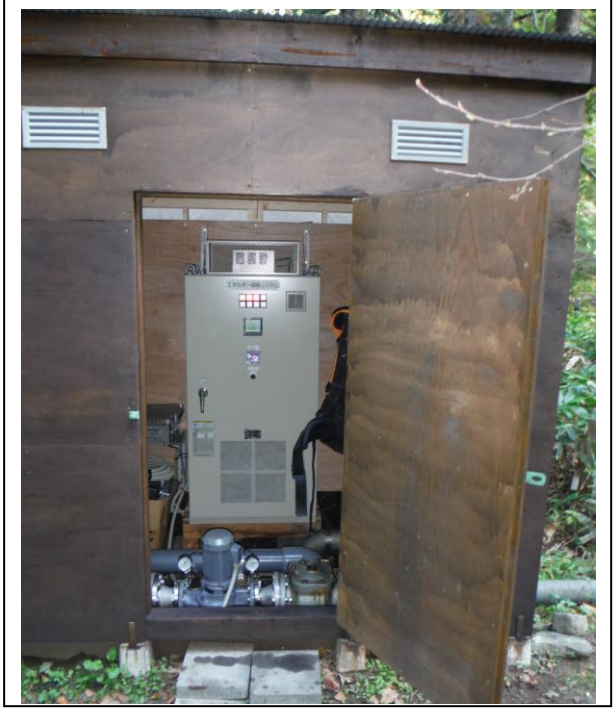
⑤　ツアーおよびグループ登山は、単独登山者よりも登山環境への負荷や他の山荘利用者へ影響を及ぼす可能性が高いことから、20人以下の少人数とされるよう関係者の自主努力を促すこと。

⑥　登山口だけでもトイレ設置が必要との認識から、その設置および維持管理について関係者間で協議すること。

⑦　山荘トイレ排泄物運搬は、ヘリと人力を併用して実施し、今後への検討材料とすること。

当会では、この提言の実現に向け、自ら努力することを提言書に明記し、2002年に早池峰山排泄物人力運搬を事務局長である私と幌尻山荘管理人の稲垣さん（当時はファンクラブ理事、現在は副会長）が実体験し、アレンジして元来、実施していた清掃登山を拡大し、2005年から幌尻山荘トイレ及び屋外に貯留式トイレ２基の排泄物人力汲み下ろし登山やヌカビラ登山口への仮設トイレの設置などに取り組んできました。

また、平取町山岳会が幌尻山荘トイレを貯留式に改修するとともに幌尻山荘屋外に貯留式トイレを２基設置し、林野庁が幌尻山荘屋外にバイオトイレ１基、その電源となる小型水力発電機を平取町役場が設置しました。



３ 今後は受益者である登山者の負担が不可欠

幌尻山荘管理者である平取町役場には、利用料金値上げによる受益者負担＝ヘリ運搬、または地元業者等による人力運搬、または携帯トイレの普及の検討を早急にして欲しいと要請を行なってきましたが、昨年まで検討されてきませんでした。

たとえば幌尻山荘使用料を1,000円値上げすれば、山荘利用者が３千人いますから年間300万円が捻出でき、排せつ物運搬代や携帯トイレの処理費用を負担することができます。受益者＝ほとんど道外在住者の多くは、自分たちの排泄物をボランティアが人力運搬していることは知らずに幌尻山荘を利用しています。

幌尻山荘利用者の大多数を占める道外在住者は、（過去の当会のアンケート調査により）1,500円という山荘利用料が安すぎると感じているわけだから､利用者が減るから利用料の値上げはできないという意見が、もしあるとすると、それは的外れだと思います。

４ 国定公園管理者の真剣な取り組みが必要不可欠

幌尻岳ヌカビラルートでは１０年以上かけて多くのボランティアと林野庁・平取町役場との連携により山岳環境の改善を図ってきました。山岳環境を改善、維持するために利用調整も取り入れていただきました。

幌尻山荘を含む幌尻岳一帯は日高山脈襟裳国定公園に指定されています。国定公園の管理者は都道府県ですので、幌尻岳一帯の公園管理者は北海道庁になりますが、当会結成以来、北海道庁が真剣になって幌尻岳一帯の公園管理をしてきたとは到底思えません。

幌尻岳における現状および問題点に明記した「日高山脈襟裳国定公園の稜線付近では幕営が登山者の判断に任せられている」点について、北海道庁日高振興局の日高山脈襟裳国定公園担当者に昨年聞いたところ「日高山脈稜線には幕営指定地がないのだから幕営は出来ない。幕営はされていないものと認識している」との回答でした。果たして現状はどうなのでしょうか？稜線上やカール内には、幕営のため土地が開削され、高山植物帯が裸地化し、カール内においてはハイマツを切った焚き火跡やトイレ跡が散見されています。現状を見ずして問題は無いと言い切る態度が悲しいです。

当会の言う関係機関とは林野庁・平取町役場だけではなく、北海道庁や隣接自治体も含まれます。これらの関係機関を包含し、北海道庁が事務局を担う日高山脈襟裳国定公園連絡協議会という組織がありますが、日高山脈襟裳国定公園には重要な案件が存在しないという理由から組織を解散すると聞いています。

登山者個人、登山愛好団体がトイレ問題を含め山岳環境の保全のために活動していくことは必要だと思いますが、一個人・一団体それだけでは山岳環境の保全を図っていくことは難しいと感じています。やはり日高山脈襟裳国定公園の山岳環境をどのようにしていきたいのか、と言う点を関係機関、団体、登山者が協議をして実践をしていく、そうしなければ山岳環境を次世代に引き継ぐことは出来ない、10 年間の日高山脈幌尻山荘排せつ物人力運搬を通して、そう感じています。

5 今夏の幌尻山荘排せつ物運搬事業は平取町役場主導で

昨年の幌尻山荘排せつ物人力運搬終了後、平取町役場・平取町山岳会・豊糠自治会（とよぬか山荘管理）・ふれないハイヤー（シャトルバス運行会社）及び当会による幌尻山荘管理運営等に関する協議会が数回開催され、今夏山シーズンから、当会が設置したヌカビラ登山口（現；シャトルバス終点）トイレの平取町への移管、幌尻山荘排せつ物運搬事業の主催者が平取町役場になることが決定しました。

協議会の呼びかけ人は平取町役場でしたが、国定公園管理者の北海道庁及び地権者の林野庁がこの協議会に入っていないことは根本的な解決にならないことにつながると思われます。

6 登山者の利便向上よりも優先されるべき山岳環境保全

上記の協議会では、トイレ問題と併せて増水により登山ルートが閉鎖になることを解消？するために尾根ルートの開削可否が検討されました。

日高山脈への登山者は、世界自然遺産にも匹敵する日高山脈の山岳環境を求めているのであって、日本アルプスのような便利なものを登山者が求めているとは思えません。もし登山者が利便性を求めてきても、新たな登山道を造成したり、自家車乗入れをさせたり、など利便性を高めるという観点に立つのではなく、世界自然遺産に匹敵する優位性を日高山脈の山岳環境が持ち続けているという観点に立って、持続可能な利用方法を検討し実践していくことこそが、結果的には永続的に登山者を得ることになり、地域振興に繋がると思っていますが当会以外の協議会参加者は目先の利益ばかりに目がいっているように思います。

近年、山岳地も観光資源という観点から登山客を増加させようという取り組みが全国各地で行われています。登山客を誘客するのであれば、登山者が増加することの弊害（山岳環境の悪化）も事前に検証し、その対策を講じなければ片手落ちだと思います。登山者が増えることによる山岳環境の悪化はトイレ問題に限りませんが、皆様はどのように思われますか？